

人々が生活を大切にしていたら、戦争は起きなかった—。

この言葉は、現在、NHKの「とと姉ちゃん」で話題になっている雑誌「暮らしの手帖」の編集長をしていた花森安治氏による。

実は、師・寺田寅彦が繰り返し、防災及び生活防衛の視点で繰り返し警句を発してしたことを突き詰めると、花森氏に通じるものがある。自分たちが今、なにげなく、当たり前のように生活している場所はどのような自然特性、歴史をもっているのか。それに沿う暮らしとはどのようなものなのか。さらに現在進行形で起こりつつあることのなかで、取捨選択すべきことは何なのか。日々、人間の生活は「断捨離」であるともいおうか。

モノや情報がはん濫した現代社会で、このような習慣を捨て去ってしまった時、人々は自分たちに降りかかるであろう危機に対して鈍感になり、その時が来てしまえば、自ら身を投じる（思考停止する）ことで、突如襲いかかった（かのようにみえる）精神的不安定から逃れようとする。破滅が確実であるにも関わらず。

ちかごろの出来事をみればその傾向が顕著にみられる。バングラのテロ、相模原の殺人しかりだ。どちらの事件も警告は発せられていた。バングラの事件では、ラマダンの期間、特に最後の日は危険であるとして外出をしなかった日本人がおり、事件現場から「とっさに」逃げて難を逃れた日本人もいた。相模原の事件では、事件現場の施設長が、本人から「障害者を殺す」との言葉を直接聞いている。にもかかわらず、なすすべもなく悲劇を招いてしまったのはなぜか。

今年の5月、国連ボランティア名誉大使であった中田武仁さんが亡くなった。中田さんは、子息の厚仁さんが平成5年4月、カンボジアで選挙監視のボランティア中に銃撃され亡くなった。商社マンであった武仁さんは、カンボジアへ向う子息と密に話し合い、どのような危険が子息に降りかかるのかシミュレーションを繰り返したとお伺いした。その結果、命を失う可能性が高いと親子で結論づけた。それでも子息のカンボジア行きを父として許したのは、「一番困っている人たちのいる所で働くことこそ、人としてなすべきこと」という子息の強い意志を尊重したからだ。

結果として、子息は命を落としたが、その過程は、バングラや相模原の事件と比べるべくもない。



カンボジアでボランティア中亡くなった中田厚仁さん

人間らしい生活とは何か。座って半畳、寝て一畳。身の丈にあった生活をするからこそ、災いを避ける最良の方法なのだと、花森氏は想い、「暮らしの手帖」につづってきたのだろう。その緊張感が「鬼の編集長」と周囲の人をしていわしめたのだろう。

(平成 28 年 8 月)